私の好きな古典の女たち

瀬戸内晴美

福武書店

瀬戸内晴美（せとうち・はるみ）
一九二二年、徳島市に生まれる。四三年、東京女子大国語専攻部卒業。五六年、「女子大生・曲愛玲」で新潮社同人雑誌賞受賞。六〇年、「田村俊子」で第1回田村俊子賞受賞。六七年、「夏の終り」で女流文学賞受賞。著書に「かの子撩乱」「美は乱調にあり」「比叡」などがある。

私の好きな古典の女たち

一九八二年二月一〇日　第一刷印刷
一九八二年二月一五日　第一刷発行

定価九八〇円

著者　瀬戸内晴美
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南四―八―八
〒一〇二　電話（〇三）二二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

©H. Setouchi 1982
ISBN4-8288-2008-6 C0095

私の好きな古典の女たち——目次

額田王——『万葉集』 7
後深草院二条——『とはずがたり』 27
和泉式部——『和泉式部日記』 47
道綱の母——『蜻蛉日記』 67
虫めづる姫君——『堤中納言物語』 87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

朧月夜——『源氏物語』 109
六条御息所——『源氏物語』 129
女三宮——『源氏物語』 181
明石——『源氏物語』 201
浮舟——『源氏物語』 221

裝丁　菊地信義

私の好きな古典の女たち

額田王——『万葉集』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

額田王

大海人皇子

少女の頃、女学校の国語の先生からこの美しい相聞歌を教えられた時の感動を、今も私は忘れることができません。

もう若くはない未亡人の鈴木とくのというその先生は、小柄な軀にいつも和服で、ブルーの袴をつけていました。色が白く、目が大きくつぶらで、声の甘い方でした。若い頃はどんなにか魅力的な人だったろうと思われました。

私はこの先生に可愛がられました。いつでも先生は私の顔を見て講義されるような気がして、私の方も先生の顔から一時間中目が離せない想いでした。

先生はこの歌を私を名ざして読ませ、すぐ本を伏せさせ、

「暗誦出来ますか、そらで詠んでごらんなさい」

といわれました。私は目をつぶって、すらすらとこの相聞歌をそらで詠みあげました。

その時、閉じた私の瞼の裏に、若草のもえひろがる蒲生野が見え、そこに万葉人の男と女が、はるかに向きあっている姿がありありと見えてきました。額田王は髪を高く結い、ブラウスにロングスカートのような衣裳をつけていました。薄いすきとおるような衣裳の下に、豊満な桃色をした肉体がほのかに見えていました。満月のような顔に、目も眉も煙るようなやさしい顔をしていました。

そして相手の大海人皇子は、私の目には白い馬に乗って、青い唐人のような服を着て、恋しい額田王に手をあげて合図しているのでした。まだ先生の講義を聞かない前に、この二つの歌が私に抱かしたイメージでした。

その後、この歌について、様々に人からも学び、書物でも教えられましたが、私の最初に抱いたイメージは変ることはありません。

そして鈴木先生は、額田王と天智天皇（中大兄皇子）と天武天皇（大海人皇子）との三角関係の恋の話を教えてくれたのでした。

相聞歌という美しい言葉もその頃はじめて習いました。恋人どうしが歌いかけ、応える歌だと

いうのです。何という雅やかな習慣を私たちの祖先の人々は持っていたことかと誇らしく思いました。

私はこの時以来、額田王のファンになってしまいました。天智天皇も天武天皇もすばらしい傑出した歴史上の英雄です。兄と弟の二人の英雄に愛された額田王がどんなに魅力的な女だったかということは想像に余りあります。

天智天皇が中大兄皇子時代に歌った有名な三山歌といわれるものをあげておきましょう。

香久山は　畝火を愛しと　耳成と　あひあらそひき
神代より　かくなるらし　いにしへも　然なれこそ
うつせみも　妻を　あらそふらしき

反歌

香久山と耳成山とあひし時立ちて見にこし印南国原

というもので、これは中大兄皇子と大海人皇子の兄弟が、額田王を中にして恋を競ったことを歌ったものと古くから解釈されています。

額田王のことは『万葉集』に長歌三首、短歌九首が載っている以外は、正史では『日本書紀』の天武天皇の条に、

「天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶りて十市皇女を生む」

とあるだけで、くわしい履歴は何もわかりません。『書紀』の中でも、天武天皇の正式の后妃、即ち皇后一人、妃三人、夫人三人の名を挙げた後にさきの文章が書かれているだけです。天智天皇の条にも、額田王は妃や夫人の中に名も載せられてはいないのです。

天武天皇は十人の妃に十七人の皇子や皇女を産ませているし、兄の天智天皇も十人の妃に十人の子を産ませています。英雄色を好むを文字通りあらわしています。

額田王には姉がひとりありました。鏡王女といい、はじめ天智天皇の寵を受け、後に藤原鎌足に贈られています。つまり姉妹して、天智天皇の愛を受けたことになります。鏡王女の名も、天皇の正式の后妃としては正史には載せられていないのです。

二人の父の鏡王は、王というのですから皇族ではあったのでしょう。たぶん、勢力のない皇族で、小説的な想像をたくましくすれば、何か政治的にいやな目にあい、大和の平群郡額田の郷のあたりに隠遁して、美しい二人の娘に学問をしこみ、ひっそり暮していたのではないでしょうか。そこへある日狩りの途中にでも立ちよった中大兄皇子が姉娘をみそめ、宮廷へ伴っていったかと考えられます。おそらく、鏡王女が十六、七歳で、額田王はまだ十歳くらいだったのではないでしょうか。

額田王が十五、六歳になった頃、同じような事情で、今度は額田王が大海人皇子に発見され、愛を受け、十市皇女を妊ったのかと思われます。

鏡王女も万葉歌人で、額田王ほど大型ではないものの、繊細で才気のある歌を作っています。

玉くしげ覆ふを安み明けて行なば君が名はあれど吾が名し惜しも

鎌足に贈ったもので、早く帰って下さらないと、夜があけてからではあなたは人に見られてもいいかもしれないけれど、私はこまってしまいます、という歌です。鎌足はこれに対し、悠然として、

玉くしげ御室の山のさなかづらさ寝ずは遂にありかつましじ

と答えています。

そんなこといっても、わたしはもうお前とはこうして寝ずにはいられないのだもの、という意味で、ずいぶんナイーヴな気取らない鎌足の面目がよくあらわれています。

もしかしたら、鎌足と鏡王女は、天皇の目をしのぶ仲になっていて、天皇がそれに気づき、粋なはからいをしてやったのかもしれません。いずれにしろ、この姉妹は妃や夫人とも呼ばれない情婦の一人であったから自由な面もあったのではないでしょうか。額田王はその歌才で、宮廷に仕え、お祝いごとなどの時に歌を詠むのを役目にしていたのだともいわれています。

けれども、三山の歌に発表するほど天智天皇がこの恋を公表しているのですから、ある時期から額田王ははっきり弟から兄の皇子へ所有権を移されたことはたしかでしょう。

これも私の感傷的な小説的想像ですが、私は額田王が本当に愛していたのは、やはり大海人皇子の方でなかったかと思います。

蒲生野の相聞歌は、ふたりのひそかな相聞歌でなく、天智天皇が諸王群臣をひきつれて、蒲生野に遊猟（薬猟）にいった時、その夜の宴会の席で、天皇の命令で即興に詠いあげたものだという説もあります。けれども私は少女の頃、相聞歌と信じたロマンティックな気持がなつかしいので、人前で儀式のように歌ったものとは考えたくないのです。「人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」という堂々とした愛の告白には、大海人皇子の誠実で大きな愛が感じられます。

ではなぜ額田王は天智天皇の愛人になったのでしょうか。私はかつて額田王を小説に書いた時、鎌足がその間に暗躍して説得したというように書きました。

鎌足という人物はいつでも人生に、二通りの道を用意していたように思います。中大兄皇子の大器を見抜き、皇子に賭けて、クーデターをおこし、一挙に蘇我氏を滅し、大化の大改新をやりとげた人物ですが、中大兄皇子に忠誠を誓いながら、娘を大海人皇子にもさし出して抜けめのない手を打ってありました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook